

二〇一六年度

普連土学園中学校 入学試験問題

二〇一六年 二月一日実施

国 語

一 次

- 一、問題に答える時間は六十分です。
- 二、問題は、

 ～

 まであります。
- 三、答はすべて、「解答用紙」に記入しなさい。
- 四、「解答用紙」は中に二枚はさんであります。

問題一

次の文章を読み、後の問に答えなさい。

近年の台風情報は、やや過剰ではないだろうか。昭和の中期から生きていると、ときどきそう感じてしまう。

かつて台風情報がきちんと報じられなかったころには、台風被害は甚大なものだった。その経験から、人死にを出さないために情報をこれでもかこれでもかと丁寧に出してくれるようになった。いまはだから、^①オオカミが来たぞ少年のようになつてゐる部分もある。

「九月一日の二百十日から二百二十日にかけて、台風がいくつか来たらしい。このらしいというのは、室戸台風という大スター登場以前のこの時代の人々は、あまり台風に関心がないのか、新聞やラジオがとりたてて扱わないからである。わずかに、各地の豪雨による被害の報道で、俊夫は^②それと察することができた。いずれにしても東京の被害は大したことはなく」

広瀬正の小説『マイナス・ゼロ』の一節である。

これは昭和七年にタイムスリップした話で、この一節は、昭和中期に生きる人間から見た昭和七年の台風情報周辺、ということになる。ちなみに室戸台風が来るのはこの二年後の昭和九年ではあるのだが、とにかくその昔は、台風情報はあまり丁寧には知らされていなかったということである。言い方を変えれば、「台風は存在していなかった」ということになる。もちろん、自分たちの住んでるところが大雨と強風に見舞われたら、それは「大風がやってきている」と認識するだろうけれど、まだ来ない台風が、自分の住んでる遙か数千キロ先を移動してるときに、情報だけで（映像付きではありませんが）「台風が近づいているんだ」と戦々恐々とするのは、つまりそれがいまの我々ですが、ちよつとこれはこれで異常なんじゃないだろうかとおもわされる描写であります。まあ我々もあまり真面目に戦々恐々とはしていないし、台風が近づくとわりと浮かれた気分になっていくのはそのとおりだろうけれど、でも「大変かもしれない」という負の部分を持つのは確かであつて、^③明治時代の人、大正時代の人ならまったく持つはずもなかった「負の気持ち」災害に遭うかもしれないをおわされているのは、^④やや奇妙な現代の風景である。

台風情報はとにかく日本国領土内で起きた場合のみ詳細に報道するという姿（人気のない海辺に記者を立ててその風雨

の強さを画像で見せようとしている努力など)は何をもたらししているかというところ、「日本のどこかで災害に遭っている人がいる」ということをとにかく克明に知らせてくれているわけで、「日本」という存在を意識させることに大きな力を発揮していることになる。意外なところでわれわれは一致団結して、同胞意識を強く感じていることになる。たぶん、報道している現場の誰も意識してないだろうけれど、そうなのだ。⑤それは桜の開花情報と同じ。

台風にはきっちりとした規定があり、場所と強さが決められている。

これからはずれると台風ではなくなり(たとえば最大風速が秒速17メートルを切ったら台風ではなくなる)、それに伴い、気象庁もマスコミ各分野も、台風とは取り扱いを変える。これは科学的態度というよりも、ひたすらに⑥杵子定規でお役所的だ。たとえば関東に台風が接近しそうだつてんで携帯電話で台風情報を見ていたとき、これは実際にそうだったんだけど「午前9時に九州沖を通過中」「午前11時に四国高知の海上を通過中、紀伊半島に上陸の恐れあり」となっていたんで、午後1時ころどうなったかと携帯画面を見たら⑥「現在、台風はありません」と大きく書いてあって、すごく驚いたもの。ものすごい速いスピードで台風が走り去ったのかとおもってしまいましたよ。違いますね。「温帯低気圧」になっちゃったので、台風情報ページを見ても、何も載ってなかったわけです。でもそのときの心持ちは「台風じゃなくなっちゃったとしても、その、雨と風のかたまりはまだ東に進んでるんだからさ、いま、どこなのか、かつて台風だったモノの行方はどうなっているのか、東京は何時に風が強くなるのか、教えるよまじに」とおもいましたね。

こういうのはつまりは、決まりがちりしていて、その枠を守ることで報道がなされているわけで、これは科学の一面でもあるだろうけれど、すごくお役所的でもありますね。

台風は、つまりいきなり消滅することもあるわけで、ということは本当に実在しているのか、とふと疑問におもう。

たとえば「上陸」に関するおかしな言説。

台風はあきらかにいま擬人化されていて、擬人化というよりはゴジラとかモスラとかそういう擬怪獣化されているというべきか、「台風本体が上陸する」ということを実に細かに予測して(なぜかだいたいはずれるんだけど)、細かく報道してくれる。台風を擬人化して報道しているのは、その被害が尋常ならざるものになる恐れがあり、⑦それを事前に防ぐための方策だとおもうが、台風の芯の芯に(台風の目のまた中心というぐらいの意味ですが)何か意味があるのだろうか、いつも不

思議でならない。

少なくとも「上陸しました」「上陸の恐れがあります」という表現は、盛り上がらないコンサート客に拍手を強要して
ような、どうも⑥しつくりこない感じがする。

報道しているほうが興奮して、それが空回りしている象徴として「台風が上陸しそう報道」があるようにおもえる。

ときに、現場のレポーターが、風雨が一瞬やんでまさに台風の目の中にいます、というレポートをしてるシーンを見るこ
とがあるけれど、いま、もつとも被害を及ぼす本体の中心にいます、そこは無風状態です、と興奮して伝えている⑧皮肉な
状況が、台風を擬人化して捉える嘘を象徴してる気がします。

台風が移動してる状況を何とか伝えようとして、でもなかなか伝えられず、つまりは「台風を科学的に分析したがってる
人たち」の興奮に引き込まれてるだけではないか、とおもえてくる。科学がサービスとして理解しやすいように擬人化した
ものを、報道現場が間違つて実態として扱つてしまい、それをテレビのこちら側にまで熱を入れて伝えようとするから、こ
っちは台風らしい気配は全然なかつたりするのに、テレビの向こうだけがなんかヒートアップしているから、「なんか変ぢ
やね？」とおもつてしまうわけである。嘘はもつとうまくついてくれ。

科学を信じすぎたために、いろんなものが見えなくなつてしまつた、という話でもある。

科学を使つてるように見せて、江戸時代に流行つた風俗と同じ手法で人を騙しにかかつていたり、縄文時代から続く呪術
的文言によつて人を縛つたりすることが多くて、これは、科学とは関係がない。科学的手法を取るといまの人たちは信じや
すいから（これはおそらく教育によるものだろう）その形を借りているだけで、中身は、科学的ではない。

それはデータを集めて、コラムを書くという仕事を続けていると、自然にわかつてくる。

私（堀井憲一郎個人）が書きたいものは（というか文章を借りてやりたいことは）、自分のおもいついたことを楽しく広
く聞いてもらいたい、というだけであつて、そのためには⑨「データを集積して分析して発表してる」スタイルを取つたほ
うが、より人が聞いてくれる、からその手法を取つているまでだ。これがいまから二万年前で、そんなスタイルではなくも
つと「食糧をどうするか」しかみんなに関心がない社会ならば、その食糧問題にからめて発言したところだし、古代世界に
生きてるならば「神の声を伝える」という手法を用いて（もしくはそれをパロディ化して）、自分のやりたい発言を行つて

たとおもう。ま、私は、さほど悪意のないペテン師にすぎないということだ。だから人が信じやすいスタイルに敏感なだけなのだ。

私と同じような心持ちの、いろんなタイプのペテン師たち（ペテン気質を持った人たち）が同じ手法を使ってる、ということである。もちろんそこには、悪意のみでそういう行為をおこなってる人もいて（悪意というのは結果的に破壊行為にいたる、というような意味で使ってます）気をつけたほうがいいんだけど、でもなかなか⑩自分たちを包み込んでいる無意識な文化的*障壁には自力では気がつきません。

（堀井 憲一郎『いつだって大変な時代』 講談社現代新書）

〈注〉*障壁……しきりの壁。交流の妨げとなるもの。

問一 〓線部①「杓子定規」・②「しっくりこない」の意味として、最も適当なものを次のア～オから選び、それぞれ記号で答えなさい。

① 「杓子定規」

- ア 状況を踏まえ、相手の考えを尊重して扱うこと。
- イ 状況を考えず、自分の思うままに対応すること。
- ウ 状況に合わせず、決まり切った形に当てはめること。
- エ 状況を見て、その場に合わせて適切に処理すること。
- オ 状況を見無視して、人に指示された通りに処置すること。

② 「しっくりこない」

- ア 受け入れることができない
- イ 納得がいかない
- ウ 折り合いがよくない
- エ あきらめがよくない
- オ みつともない

問二 —— 線部①「オオカミが来たぞ少年のようになってる」とありますが、これは、「近年の台風情報」がどのようになっているということですか。答えなさい。

問三 —— 線部②「それ」・⑦「それ」の内容をそれぞれ答えなさい。

問四 —— 線部③「明治時代の人、大正時代の人ならまったく持つはずもなかった」とありますが、「明治時代の人、大正時代の人」が「負の気持ち」を持つはずがなかったのはなぜですか。説明しなさい。

問五 —— 線部④「やや奇妙な現代の風景」とありますが、どのような点が「やや奇妙」のですか。最も適当なものを次のアから選び、記号で答えなさい。

ア 情報ばかりが先行し、現実になったわけでもないのに大変だと思ひ込んでしまう点。

イ 情報に映像が付いていると現実として感じ、映像が無いと現実感を感じない点。

ウ 情報によって負の気持ちを抱きつつ、同時にどこか浮かれた気分も持つてしまう点。

エ 情報与えられるせいで、本来は持つ筋合いの無い負の気持ちを抱くことになる点。

オ 情報からきちんと判断しなければならぬのに、真面目に戦々恐々としようとしぬ点。

問六 —— 線部⑤「それは桜の開花情報も同じ」とありますが、「桜の開花情報」と「台風情報」のどのようところが「同じ」のですか。「ところ」につながるように、本文中から三十字以内で抜き出し、最初と最後のそれぞれ五字を答えなさい。

問七 —— 線部⑥「『現在、台風はありません』」とありますが、この台風はどうして急になくなってしまったのですか。説明しなさい。

問八 —— 線部⑧「皮肉な状況」とありますが、どのようなところが「皮肉」のですか。説明しなさい。

問九 —— 線部⑨「『データを集積して分析して発表してる』スタイル」とありますが、これはどのようなやり方のことですか。本文中から五字で抜き出して答えなさい。

問十 ——線部⑩「自分たちを包み込んで無意識な文化的障壁には自力では気がつきません」とありますが、それはどう
いうことですか。最も適当なものを次のア〜オから選び、記号で答えなさい。

ア 科学を根拠きよとしているかのよう示されたことをついつい受け入れてしまいがちなのは、現代の人々が科学を信頼ちんらいし
ぎているからだということが、なかなか自覚できないということ。

イ 明確な科学的根拠をもって示された事実を受け入れるのは、現代の人々が科学を何の疑いもなく信じているからだとい
うことが、なかなか自覚できないということ。

ウ 科学的手法で研究されたことを安易に承認するのは、現代の繁栄はんをもたらした科学に我々が信頼をよせているからだ
ということが、なかなか自覚できないということ。

エ 科学的な裏付けがあるかのように見せられたことを受け入れてしまうことで、現代の人々は科学を必要以上に信じるよ
うになったのだということが、なかなか自覚できないということ。

オ 科学を使っているように見せかけて説明されたことに批判的であるのは、現代の人々が科学を万能ばんであるかのように考
えているからだということが、なかなか自覚できないということ。

問題二

次の文章を読み、後の問に答えなさい。

夏休みに入ってからというものの、僕の日々は、昼は三崎^{みさき}に^aむげに断られ、夕方はミヤコとサナオに責められるという具合に続いていた。三崎の母親はあんまり当てにならず、毎日僕は三崎に嫌^{いや}な顔をされては追い返されていた。三崎のことはなんとも思っていないとはいえず、こんなふうとうしがられては、やっぱり気は滅^め入る。これでは、普通^{ふつ}に学校に行っているほうが、ずっと楽だ。

「そんなんで、狐^{きつね}がえりに間に合うの？ もう一週間しかあらへんのに。もつと真剣^{けん}に誘^{さそ}ってや」
一通り練習が終わった後、ミヤコが高い声でえらそうに言った。ミヤコは怒^{おこ}ると声が高くなって早口になる。おばちゃんにそっくりだ。

「そんなん言うんやったら、ミヤコ、お前が説得してくれよ」
「嫌や。あの人、性格悪いもん」

三崎と話したこともないのに、ミヤコが言った。

「同じ歳^{とじ}の和兄が説得できへんのに、小学生の私の言うことなんか聞くわけないやん」

「そんなもんかなあ。でも、ミヤコは女の子同士やん。意外とうまくいくかもしれへんで」

「そんなん関係あらへん」

ミヤコの言うことは、いつも自分に都合がいい。

「ね、鮎^{あゆ}は？」

サナオが僕の短パンのすそを引っ張りながら言った。

「鮎？」

僕もミヤコも首をかしげる。

「鮎がどうしたん？」

「鮎を花子ちゃんにプレゼントするねん」

「プレゼント？」

「うん」

サナオは大きくうなずいた。

「なるほど。物で釣るんか」

「それって、いける！ きつと都会の人って、捕れたての鮎とって食べたことないから、鮎をあげたら感激するよ」

ミヤコも目をきらきらさせはじめた。

「そやなあ」

僕は釣りたての鮎ふに塩を振って焼き、かぶりついたときの味を思い出した。口に入れたとたん、みずみずしい身がはじける。想像するだけで、よだれが出そうになった。① さすがの三崎も鮎には参るに違ちがいない。

「そうそう！ 女の子ってプレゼントされたら、すぐく嬉うれしいもん。三崎花子やって、すぐに気分よくして、狐がえりに飛んできてくれるわ」

「そうそう！ 飛んできてくれるわ」

サナオはにこにこしながら、ミヤコの言葉をくり返かえした。

……中略……

「おいしそうや」

サナオは何回も袋ふくろの中の鮎のぞを覗きこんだ。

「ほんまや。今すぐ焼いたら、絶対おいしいで」

僕もごくりとつばを飲み込んだ。

「あかんって。全部三崎にあげないと」

何とかして食べようとする僕とサナオは、ミヤコに何度もダメ押しおされた。

「なんで。こないっぱいいらんやん」

「そうや。一匹びきくらい食べたっていいやん」

「けちると、うまくいかへんのよ。女の子はけちな男は嫌きらいなんやもん」

最近、ミヤコはすぐ女の子はこうだって言う。つるつるの短いスカートから、擦り傷だらけのひざを丸出しにして、男の子よりも速く走るミヤコは、どこにも女の子っていうイメージはない。②僕はミヤコが「女の子は」って言うたびに、吹き出しそうになってしまう。だけど、しつこく食べたがる僕とサナオから、③必死で鮎を守るミヤコは頼もしい。本当は、ミヤコは誰よりも鮎が好きなのに。きつと、ミヤコもサナオも僕と同じように、狐がえりのことを真剣に考えているのだ。

鮎の入った袋を大事に持って、三人で三崎の家の前に並んだ。「うまくいきますように」と、ミヤコがぱちんと手を合わせた。サナオは成功することが目に見えているのか、嬉しそうにジャンプしながら三崎家のチャイムを鳴らした。

「あれ？」

三崎花子はドアを開けると、僕だけじゃないことに驚いた。

「ああ、ミヤコとサナオ。みんな狐がえりのメンバーやねん」

ミヤコは小さなお辞儀をして、サナオだけが元気よく大きな声で「こんにちは」と、挨拶をした。

「えっと、あの、これ」

僕は二人の紹介もそこそこに、すぐに鮎の入ったビニール袋を三崎に差し出した。

「何？」

「三人で釣ったんや。あげるわ」

三崎は怪訝そうに袋を受け取った。ミヤコもサナオも、わくわくした顔で三崎を見つめている。ところが、④三崎は中を見たとたん、小さな悲鳴を上げ、鮎の入った袋を地面に落とした。

「なんや。そないに驚かんといて」

僕は突然のプレゼントに驚いたのかと思い、鮎の入った袋を拾うと、もう一度、三崎に渡そうとした。だけど、三崎は手を出そうともしない。

「いや、こんなのいらない」

「へ？」

僕たちは予想外の三崎の反応に戸惑った。三崎が遠慮していると思ったサナオが「大丈夫。全部あげるから」と言って、三崎の手を取り、鮎の袋を握らせようとした。しかし、三崎は手を固く握って、受け取ろうとはしない。

「そんなの気持ち悪い」

三崎はうつむいたまま言った。

「何も気持ち悪くないって、鮎あなちゃんか。汚きたないもんやないで。今日、朝からみんなで釣つってん。新鮮せんやし、うまいんやで」

「いらないよ。そんなの」

「そう言わんと。食べてえな」

僕ぼくがもう一度、袋を三崎に押し付けると、

「気持ち悪い。絶対無理！」

と、三崎は右手で袋を払いのけた。その弾はずみで袋は勢いきよく落下し、中から何匹かの鮎あなが飛びだした。土に投げ出された鮎あなは、なんとも情けない格好をしている。その様子にびつくりしたのか、鮎あなを断られてシヨックだったのか、突然サナオが泣きだした。

「いや、あの、ほら、生なまの魚いしってあんまり見ないから……」

三崎が、しゃくりあげるサナオにおろおろしながら声をかけた。

「ほんま、あんたって最悪さいあくや。ひどいことばっかりしよる。あんたなんか、こつから出て行ったらええのに」

今まで黙だまっていたミヤコは、三崎の顔をにらみつけて怒鳴どなった。そして、サナオの手をとって、走り出した。

「ちよつと、ミヤコ、待つてや」

ミヤコは僕ぼくが声をかけても振り返らず、泣ないでいるサナオを強引ごうぎんに引ひつ張りながら、走はって行ってしまった。

どうしてこんなことになってしまったのだろう。うまくいくはずだったのに、大失敗だ。三崎もミヤコもサナオも、みんな気を悪くしてしまった。物で釣つろうとした**⑥**姑息こそくな手段しゅんがだめだったのだろうか。

三崎はサナオに泣かれ、ミヤコにでかい声で怒鳴どなられて、ぼんやりと立たっていた。これでは狐きつねがえりに誘いうどころではない。

「気にせんといて」

僕ぼくはそう言い残のこして、鮎あなを拾ひろい集あめると、ミヤコたちの後を追おいかけた。

「僕」は三崎の考えていることが分からなかったが、三歳^{さい}年上の姉に「都会のねずみと田舎のねずみ」——都会で暮らしているねずみと田舎で暮らしているねずみが、それぞれ互^{たが}いの住みかをうらやましがって交換^{かん}するが、いざ生活してみるとちつとも楽しくなかった——という話を出され、「残念ながら姉ちゃんの言うことには一理^{なつ}ある」と納得^{なつ}する。

都会の中学生と田舎の中学生は、ねずみほどじゃないけど、やっぱり違いはある。僕にとつてすごく貴重なものでも、三崎にとつては気味悪いものなのかもしれない。狐がえりだつて、それと一緒に^{しよ}。僕らは昔からやつてるから疑問もないけど、三崎からしたらすごい変なこともかもしれない。

僕は都会に転校して、毎日ヤンキー風の中学生に「一緒にヒップホップダンスを踊^{おど}ろうぜ」と誘^{せう}われている自分を想像してみた。それは、とんでもなくうつとうしい。そのうえ、都会にだけ生息^{せいそく}している不気味な生き物を、おいしいから食えと集団で持つてこられたら、やっぱり引いてしまう。こつそり田舎に引き返してしまいたくなるはずだ。

きつと、三崎だつて、毎日、田舎丸出しの僕にわけのわからない祭りに誘^{せう}われ、嫌な思いをしていたに違^{ちが}いない。⑤最近^{さい}の僕は、狐がえりに踊^{おど}らされてしまつていた。僕はそう考えると、じつとしていられなくなつた。

夏は夜。去年国語で習^まつた『枕草子』で、昔の女の人が言^いつてたように、僕もそう思う。昼間はあんなに暑^{あつ}かつたのに、日がかげるとひんやりする。だけど、他の季節とは違^{ちが}い、真^まつ暗^{あん}になつても、日のぬくもりが木々や道にも残^{のこ}つていて、まだ外^{そと}にいても大丈夫^{だいじゆう}つていう解放感がある。三崎の家までの道も、昼間に歩くより気持ちがいい。

三崎の家からはオレンジ色の光が漏^もれている。今頃^{いま}、あのおばさんと三崎とおじさんで夕飯^{ゆふめ}を摂^とっているころだろうか。それとも、八時過ぎだから、みんなでゆつたり過^{すご}しているのだろうか。

三崎の家のチャーム越^こしに、名前^なを告^つげると、三崎が表^あまで出てきた。つつかけをはいて、お風呂^{ふろ}呂^ろ上がりなのか、こざつぱりした短パンとTシャツを着^きている。

「こんばんは。遅^{おそ}くにごめん」

「何？」

三崎は昼間の鮎^あシヨックのせい^せいか、心^{こゝろ}なし、穏^{おだ}やかな返事^{こたへ}をした。三崎家の門に備^おえ付けられた小さな外灯^{げんとう}が、三崎の顔

をぼんやりと照らしている。

「もう狐がえりのことはええで」

「は？」

僕が早速用件を告げると、三崎はいつもと同じように顔をしかめた。

「そやから、狐がえりのことはもう気にしんといて」

「どうして？」

「どうしてって、無理やり誘うのは悪いしな。三人でがんばることにするわ」

「そうじゃなくて、どうして、わざわざ夜にそんなことを言いに来るのよ。明日から誘いに来るのをやめれば、それでいいことでしょう？」

「そりやそうやけど、俺、毎日来てたやろ？ そやから、お前、いつ来るかいつ来るかって、気にしてたら悪いし。嫌なことからは少しでも早く解放されたほうがええやろ？ そやから早く言うとかなくて思つて」

「ふうん」

三崎は不思議そうな顔のままうなずいた。

「それと、ミヤコ、ほら、おかつぱの小さい女の子おつたやろ？ あいつ、口悪いけど、言うたことは五分で忘れよるから、気にしんといてな」

「別に気になんてしてないわよ。そんなこといちいち言わなくていいのに」

「そつか。気にしてへんのやつたら、ええんやけど。でも、お前友達おらんし、ミヤコは小学生やけど、一応女の子同士やし、一人でも仲良くなれるチャンス壊したらあかんかなくて思つて」

僕がそう言うと、三崎はしばらく考えこんでから、

「川居君って、やつぱり超失礼だね」

と言った。だけど、この間みために、怒って部屋には帰っていかずに、

「でも、まあ、^⑥それ以上に優しいから許すけど」

と笑った。

「なんやねん、それ」

僕は思いがけず、優しいなんて言われて、真つ赤になった。

三崎はそれには答えず、玄関かんの前の石段に腰掛こしかけると、「座まつてよ」と僕にも指示をした。

短パンからすらりと伸びた三崎の脚あしに、ちよつとだけどきどきして、僕は少し離はなれて隣となりに座まつた。

「私、引こつ越こしっ子こなのよね」

三崎は僕が座まつたのを確認すると、突然話し始めた。

「なんやそれ？」

「今までに通算五回は引こつ越こしをしてるってこと」

「そういうの引こつ越こしっ子こって言うのか。ほんま都会のやつらは、勝手に言葉生み出しよるなあ」

僕が言うと、三崎がけらけら笑わつた。

「川居君の方言のほうが、よつほど意味不明だけどね」

方言は伝統や。若者言葉とはわけが違う。僕はそう言いかけたけど、とりやめた。そんなこと言ったら、年寄りだと思わ
れてしまう。

「私わたしって今いままでに、小学校を二つ、中学校はなんと三つも渡り歩いてるのよ。すごくない？」

「そつか。だから、三崎さんざきって性格が悪いのか」

僕が納得すると、

「本ほん当とうに失礼。田舎の子こって、言葉を選えらぶって作業を知らないのね」

と、三崎が膨ふくれた。

「言葉が悪いのは、お前まへだつてやん。その田舎の子こって言うの、ほんまやめたほうがええで。俺おれは寛大かんやで怒おこらんけど、他のやつが聞きいたら、しばかれるで」

「川居君かわいだつて、都会の人間にんげんはつて、すぐ言うじゃない」

「うそや。そんなこと言うた覚えおぼえない」

「でも、川居君が頭あたまの中でいつもそう思おもつてることぐらい、お見通みとおしよ」

「ほんまに？」

僕はぎくつとした。三崎と話すたび、だから都会のやつはって、しょっちゅう心の中で叫んでたから。

「うそ。ほんと単純だね。田舎っ子は」

三崎はまたけらけら笑った。三崎は笑うと少し声が高くなって、かわいい。いつもこんな風にしゃべればいいのに。

「とにかく、親の都合で、あちこち転々としなないといけないなんて、ひどいでしょ？」

「まあなあ。そやけど、仕事やし、しゃあないやん」

「まあね。だけど、会社の命令ならまだしも、ここに来たのはお父さんやお母さんの意思だよ。勝手に脱サラされちゃって、本当いい迷惑だよ」

三崎はため息混じりに言った。三崎のおばさんも、三崎もこんなに楽しくなさそうだなって、三崎家がここに来たことは失敗だったのだろうか。

「そやけど、いろんな学校行けると思ったら、ちよつと楽しいやん」

僕らの学校は人数も少なく、転校どころかクラス替えもない。だから、今までと違う人間の中に入っていくのは、少し憧れる。

「まさか、そんなことが楽しいわけないよ。転校生の位置って、難しいのよね。もう固まっている人間関係の中に入っていくんだから。明るすぎても凶々しがるし、おとなしくすると、ずっとそのまんま放つたらかされるし……。どうふるまうかが大切なの。成功して、人気者になったこともあるけど、失敗して、いじめられることもあった」

三崎は淡々としゃべった。

「ふうん。難しいもんなんやな」

「しかも、今回はこんな田舎でしょう？ 今までの生活とは、まるで違うじゃない。だからいつにも増して気が重いんだよね」

「⑦ 私ね。引越す前からいろいろ調べてたんだよ」

三崎がにっこり笑った。

「何をや」

「このこと。関西地方の人間は、標準語を話す人間を嫌つてるとか、ばかつていうより、あほつて言わなくちゃいけないこととか。味付けは薄めだとか、お好み焼きをおかずにご飯食べるとか。この地域に隣組制度があることも知つてたし。田舎の人は鍵をかけないとか、田舎の子どもはそこら中の草でも食べるとか……」

「なんや、そのいい加減な情報は」

僕は続々と出てくる三崎のインチキ臭い知識に笑つてしまった。僕達が都会を誤解しているように、三崎もこの地を本当には知らない。同じ日本の中でも、こんなにも誤差が生じるのだ。実際にそこで暮らさないと、その中に入つていかないと、確かなことはわからない。

「笑いごとじゃないよ。真面目にインターネットで調べたんだから」

噂は聞いたことあるけど、インターネットつて、ほんまに恐ろしいもんなんやなあ」

「だけどさあ、うまくやれるようにつて調べたのに、逆に知つてしまつたら、なんか余計にだめなんだよね。ここに関する知識を仕入れれば仕入れるほど、どうふるまつていいのかわからなくなつちゃう。関西弁しゃべろうとしても、うそくさくなつちゃうし」

三崎もそう言つて、笑つた。

「そんな予備知識、無駄やつて。三崎が標準語しゃべつてようが、ばかつて言おうが、なんちゅうの、チヨベリバとかわけわからん若者言葉しゃべつてても、お前がいいやつやつたら、きつとうまくやつていけるつて」

「そうかなあ」

「そうや。インターネットの情報なんて、当てにならん。それより、俺らと一緒に狐がえりしたほうが、よっぽど、このことがわかる」

「そっか。そうだね」

三崎は素直にうなずいた。

「でもすごいね。川居君つて、熱心。こんなに根気強く何かに誘われたの初めて」

「そうなん？」

「ほら、転校生って初めは珍しがられるけど、その分、すぐに飽きてみんな見向きもしくなくなるから」
僕が熱心なのは、残念ながら狐がえりのためだ。伝統を守るためだ。三崎と友達になるうなんて気持ちは、まるでなかつた。⑧ 三崎の顔が嬉しそうで、少し胸が痛んだ。僕はなんとも言えず、ただあいまいに微笑んだ。

「でも、今どき、東京でもチヨベリバなんて言葉遣ってる人、いないよ」

三崎はそう笑って立ち上がった。

「ああ、ごめん。遅くなってもうたな」

「いいよ。おやすみ」

三崎はドアに手をかけると、

⑨「じゃあ、明日ね」

と手を振った。

「ああ。明日？」

(瀬尾

まいこ「狐フェスティバル」

『Teen

Age』

双葉文庫)

問一 —— 線部①「むげに」・②「姑息な」の意味として、最も適当なものを次のア～オから選び、それぞれ記号で答えなさい。

① 「むげに」

- ア きつく
- イ さらりと
- ウ そっけなく
- エ ていねいに
- オ やんわりと
- ア 悪意に満ちた
- イ いやみったらしい
- ウ 自分勝手な
- エ その場のしのぎの
- オ 配慮に欠けた

② 「姑息な」

問二 —— 線部①「さすがの三崎」とありますが、「さすが」というのは「三崎」のどのような態度のことを言っているのですか。答えなさい。

問三 —— 線部②「僕はミヤコが『女の子は』って言うたびに、吹き出しそうになってしまう」とありますが、それはなぜですか。説明しなさい。

問四 —— 線部③「必死で鮎を守るミヤコは頼もしい」とありますが、「僕」は、「ミヤコ」の頼もしい姿に、彼女のどのような思いを感じていますか。説明しなさい。

問五 —— 線部④「三崎は中を見たたん、小さな悲鳴を上げ、鮎の入った袋を地面に落とした」とありますが、それはなぜですか。説明しなさい。

問六 ——線部⑤「最近の僕は、狐がえりに踊らされてしまっていた」とありますが、それはどういうことですか。最も適当なものをお次の方から選び、記号で答えなさい。

ア 「狐がえり」の成功のために三崎を仲間に誘っていたはずが、いつしか誘うこと自体が目的になってしまっていたという事。

イ 「狐がえり」の練習をすることに忙しくて三崎の気持ちを思いやれず、三崎への誘い方が一方的で強引なものになってしまっていたという事。

ウ 自分たちの土地の伝統行事である「狐がえり」は守るべきものであり、三崎も参加するのが当然だと思い込んでしまっていたという事。

エ 「狐がえり」を成功させることに夢中になるあまり、すべてを「狐がえり」と結びつけ、周りが見えなくなってしまっていたという事。

オ 古くから伝わる「狐がえり」の踊りのあやしげな魅力にすっかり心を奪われ、冷静な判断ができなくなってしまっていたという事。

問七 ——線部⑥「それ以上に優しい」とありますが、「僕」の優しさとして当てはまらないものを次のア～オから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「狐がえり」の練習に無理やり誘うのをやめてくれたところ。

イ 少しでも早く嫌なことから解放してあげたいと思うところ。

ウ 早く友達ができるように気づかってくれるところ。

エ 「僕」がいつ来るか気にさせていたら申し訳ないと考えるところ。

オ ミヤコが言った悪口に傷ついていないか心配してくれるところ。

問八 ——線部⑦「私ね。引越す前からいろいろ調べてたんだよ」とありますが、「三崎」はなぜ引越す前からこの土地のことを調べていたのですか。説明しなさい。

問九 — 線部⑧ 「三崎の顔が嬉しそうで、少し胸が痛んだ」とありますが、それはなぜですか。次の文の空欄に合うように答えなさい。

三崎は、が、「僕」は、から。

問十 — 線部⑨ 「じゃあ、明日ね」とありますが、「三崎」は明日どうしようと思っていると考えられますか。最も適切なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア 自分の方から「僕」の家を訪問して、今日の話の続きをしようと思っている。

イ 標準語で会話を続け、自分と「僕」とでは暮らしが全く違うことを分からせようと思っている。

ウ 自分に興味を持ってくれた「僕」のために、かわいい服を着て会いに行こうと思っている。

エ 「僕」が熱心に誘ってくれた「狐がえり」の練習に顔を出そうと思っている。

オ これまで通り「狐がえり」の勧誘かんゆうにくる「僕」を追い返そうと思っている。

問題三

次の①～⑩の——線部のカタカナは漢字に、漢字はひらがなにそれぞれ直しなさい。

- ① 彼は、カ|ンシ|ョウ|にひたつていた。
- ② 彼の絶妙なコ|ワ|ザ|にしてやられた。
- ③ 空と海のサ|カ|イ|に目をこらす。
- ④ 試験を目前に控|え|、先生に質問をア|び|せる。
- ⑤ 今度の日曜日|に山菜を|とり|に行く。
- ⑥ あの学校は全|国|大|会|出|場|の常|連|校|だ。
- ⑦ 今年も年|始|のお祝|い|をする。
- ⑧ 体温を測|った|ところ、七|度|五|分|の熱がある。
- ⑨ 上級生と下級生の交|流|の場|を設|ける。
- ⑩ 失敗したことをいつ|ま|でも|気|に病|む。

問題四

次の①～⑩について、二つの文中の□に共通して当てはまる漢字一字を答えなさい。

- ① 彼女は□敬に値する人物だ。 人の命は何よりも□い。
- ② お手紙を□見しました。 山頂で初日の出を□む。
- ③ 彼は事実を□認していた。 漢字を書き□まる。
- ④ 協力して困□を乗り越える。 先生の話は□しかった。
- ⑤ 彼は責□感が強い。 その件は私に□せてください。
- ⑥ 休日に□画を見に行く。 湖面に山の姿が□る。
- ⑦ 緊張で頭が混□する。 服装の□れを直す。
- ⑧ 収集した資料を提□する。 墓前に花を□える。
- ⑨ 集合時間を□守すること。 父親に□しく叱られた。
- ⑩ 気温が急□に下がる。 □しい口調で責められる。

問題五

次の①～⑩の文の空欄に入る適当なことを、——線部の慣用表現の語源を参考にして答えなさい。
ひらがなでもかまいません。

① 幸運にも自分の計画を説明する機会を得た私は、満を（ ）てその会議に臨んだ。

【語源】 弓を引き絞った状態を保つこと。

② 順調に業績を伸ばしてきたが、現状に甘んじることなくさらなる発展に向けて布石を（ ）べきだ。

【語源】 囲碁で、序盤に全体の局面を見据えて碁石を置くこと。

③ そんな詐欺のような仕事の片棒を（ ）のはまっぴらごめんだね。

【語源】 駕籠の前棒と後棒をそれぞれの肩にのせて、二人組で駕籠を運んだこと。

④ 宿命のライバルとしのぎを（ ）ことで共に成長を重ねることができた。

【語源】 刀の、刃と峰（背の部分）の間で、高くなった部分である「しのぎ（鎬）」がそげ落ちるほど激しく斬り合う様子のこと。

⑤ 長年手塩に（ ）て開発してきた製品が日の目を見るときがやってきました。

【語源】 「手塩」と呼ばれる少量の塩が食膳に置かれ、自分で味加減を調べていたこと。

⑥ この事件の解決には、陰で糸を（ ）ている人物を特定することが重要だ。

【語源】 操り人形は、見物人から見えないように、人形師が陰から糸で動かしているものであること。

⑦ 大リーグの強打者を次々に手玉に（ ）た彼の投球術は見事であった。

【語源】曲芸師が「お手玉」を自由自在に扱うこと。

⑧ 偉えらそうに御託を（ ）てばかりいても自ら動かなければ人に信用されなくなるぞ。

【語源】「御託」は神からのお告げである「御託宣」を略した語であり、「御託宣」を語る者は、態度が偉えらそうにも見え、その話が次から次へ、長々と続いたこと。

⑨ お金が必要になって、長年乗っていた愛車を下取りに出したところ、業者に足元を（ ）れて買ったたかれた。

【語源】昔、街道筋や宿場などで、駕籠屋が旅人の足元の様子から疲つかれ具合を判断し、それによって代金を決めて要求したたこと。

⑩ いくら気に入らないからといって、人の尻馬しりまに（ ）て騒さわぎ立てるのは感心しない。

【語源】他人が手綱たづなをとる馬の尻にまたがったり、前を行く馬について行ったりすること。

(以下余白)